



Title	語とは何か？
Author(s)	林, 榮一
Citation	大阪外大英米研究. 1959, 1, p. 38-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98921
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

語 と は 何 か ？

林 榮 一

0. 語とは何か？ 何によらず、開き直って規定しようとする、收拾がつかなくなるが多い。言語も学問的に扱う段になると、バケモノみたいなもので、その *élan vital* のすさまじさ、まことに予断を許さないものがある。語という単位も、日常我々は殆ど自明のものとして受けとって使用しているのだが、これがまたとんだ *Proteus* で、この正体をつきつめるのに、今までどれだけの学者が努力を重ねたことか。ところが、いつでも *résidue* が生ずるのである。実際すべての言語に適用されるような基準をたてることは不可能のように思はれもする。あるいはこれは結局 *Scheinproblem* であるのかもしれない。Jones は *phoneme* を定義する際に *undefinable* ということに触れている¹⁾が、これに限らず科学上の概念は *operational* な意味における実在である場合が多い。Twaddell が *phenome* なるものを *abstractional fictitious unit* としたのも首肯されるのである。²⁾ de Saussure が ‘*Il faudrait chercher sur quoi se fonde la division en mots... mais c'est là un sujet qui remplirait à lui seul un volume*’³⁾ と述べて通例のやり方ではラチがあかぬことを示し、‘*il est préférable d'aborder le problème par le côté de la valeur...*’⁴⁾ と考えたのも同様な事情によるものであって、さすがに達見であった。その点、現実的な Jespersen は *philosophy* の中で *Word* なる項目を設けたものの、問題の複雑性を例示しただけで、根本的な彼自身の解釈を示すところがなかった⁵⁾ のは惜しまれる。

1) Jones, D. ‘Chronemes and Tonemes,’ *Acta Linguistica*, IV.

2) Twaddell, W. F. *On Defining the Phoneme*, Lang. Monograph 16.

3) de Saussure, F. *Cours linguistique générale* p. 154.

4) Loc. cit.

5) Jespersen, O. *Philosophy of Grammar*, pp. 92—95.

しかし、Jespersen のとった態度は、各言語の事実をそのまま素直に受けとる限り、良心的であって非難することはできない。多種多様の実現が存在するからである。Sapir は米土語を研究したが、wii-to-kuchum-punku-rügani-yugwi-va-ntü-m(ü) = knife-black-buffalo-pet-cut up-sit (plur.) -future-participle-animate-pl. = they who are going to sit and cut up with a knife a black cow (or bull) という Paiute 語における語的単位の例をあげている。⁶⁾ これなどは、従来の印欧言語学ではどうにもならない。しかも彼の実験によれば、これらの言語の使用者はそのような複雑な内容をもつ音声連続を語の単位に分けることが容易にできるのである。⁷⁾ 困難な問題は もっと身近にもある。「句おこせよ梅の花」と「梅の花と実」において、同じ「梅の花」が前者では1語、後者では3語であるとされるが、それはどういうことであるか。英語の hot water (2語) は日本語では「湯」(1語) である。もちろん言語の形式が異なるからであるには相違ないが、それを支えているものは何か。これらの問題に関しては、いろいろな説が述べられてある。また不敏の筆者が画期的な新説を展開できる筈もない。それにもかかわらず、ここに屋上屋を重ねるような試みを企てるのは、それらを整理して考えること自体が有意義であると考えからで、このことから何か一筋の光明が与えられるかもしれないというハカナイ希望もある。Sysiphus の骨折りに終るとは思うものの、悲しきは homo sapiens のサガではある。

1. 一般的な語の定義 まず、常識的な語の定義を若干拾ってみて、足がかりをつくってみる。それには辞典の説明を利用するのが便利であろう。普通の辞書は一般人のためのものであるから、一応わかり易いものになっているのは当然である。しかし権威のある辞書のものは、決してお座なりでなく、よく考えてあり参考になる。我々が頻用するものでは、まず *OED* があるが、‘A combination of vocal sounds, or one such sound, used in a language to ex-

(6) Sapir, E. *Language*, p. 31.

(7) *Ibid.*, p. 35.

press an idea (e. g. to denote a thing, attribute, or relation), and constituting an ultimate minimal element of speech having a meaning as such; a vocable' とある。COD は 'Any sound or combination of sounds (or its written or printed symbol) recognized as a PART of speech, conveying an idea or alternative ideas, and capable of serving as a member of, the whole of, or a substitute for, a sentence.' と述べている。Webster は, 'An articulate sound or series of sounds which, through conventional association with some fixed meaning, symbolizes and communicates an idea, without being divisible into smaller units capable of independent use; that is, the smallest unit of speech that has meaning when taken by itself; a vocable' といい, ACD には 'An element which can stand alone as an utterance, not divisible into two or more parts similarly characterized; thus *boy* and *boyish*, but not *-ish* or *boy scout*, the former being less than a word, the latter more' とある。Mario Pei の *A Dictionary of Linguistics* は手輕なものであるが, 序でにのぞいてみると, 'A spoken or written symbol of an idea, usually regarded as the smallest independent sense-unit' として, 次に Ullmann, Bloomfield, Palmer などの定義を簡単に引用してある。市河三喜編「英語学辞典」は Sweet の定義を主として説明し, 中島文雄編「英文法辞典」では問題点の列举がみられ, 大塚高信編「新英文法辞典」には構造言語学的観点がある。

以上の定義を煎じつめてみると, 「発話の中でまとまった意味をもつ最小の独立しうる音声結合体」ということになるだろう。この限りにおいては格別異議をとええることはなさそうである。さすがによく考えてであると思う。少くとも普通の英語の単語に関してはこの定義で充分間に合うであろう。この点 Sweet の有名な定義 'A word may be defined as an ultimate independent sense-unit'⁸⁾ よりもずっと明確である。Sweet は 'Cats catch mice.' という例を

8) Sweet, H. *New English Grammar*, § 52.

あげて、これが3語より成ることを説明しているので、その意味するところはわかるのであるが、その言葉遣いは厳密さを欠いているといえよう。英語学辞典の説明は好意的な解釈であるが、大塚博士も言われるように⁹⁾、ultimateは「これ以上は分割できない」、independentは「文において一まとまりのものとして自由にあらわれうる」という意味でなければならず、sense-unitはsemanto-phonetic unitと読みかえなければナンセンスである。そうしなければ、in spite ofとdespiteなどは区別がたてられない。そこで上のような解釈を施すと、上にあげた辞書の共通的定義と実質上は同じことになる。ここで明らかになったことは、語は言語の単位であること（断らなくてもよいかもしれないが、思惟そのものでないことに注意）、従ってそれは常に形態によって制限をうけていること、ただし同時に意味の統一体でなければならぬこと、独立して自由に用いられること、これ以上分けてはその統一性が保てなくなる最小の単位であること、等である。これは現在の構造言語学の到達した考え方と殆ど差異がないともいえる。少くとも外見上はそのように思われる。しかしよく考えてみると、これでは何一つわからないともいえるのである。上に「異議をかまえることがなさそうだ」といったのは、実は異議をとなえることができないほど茫漠としているということである。つまり包括的にすぎて具体的に規定する方法が示されていない。読み方次第で伸縮が自在である。たとえば、意味的統一性とは何か、形態とは何か、独立性とは何をいうのか、最小とはそれを決める基準は何か、等々実は疑問が山積している。たとえば、I'mは1語か2語か？ the daughter of the Pharaoh's sonはどのような客観的手順によって語に分けられるか？ そのような疑点を残さぬ論述を伴わない限り、一般的な論議は余り有意義ではないと考えられるのである。しかし、ここでGrayが‘a complex of sounds which in itself possesses a meaning fixed and accepted by convention’¹⁰⁾ といっていることにも注意したい。これは更に

9) 大塚高信「英文法演義」, pp. 43—54.

10) Gray, L. H. *Foundations of Language*, p. 146.

漠然としている。これはもはや定義とはどう考えてもいえないように思う。とはいえ、彼にこんなことがわからぬ筈はないのであるから、そのような表現をしたこと自体に意味があると考えなくてはなるまい。事実彼はその頁の脚注で Uldall からの批判を掲載しているのであって、その中で Uldall は Maidu 語を引用して語の複雑怪奇な様相に触れ、結局 ‘I am very shy of defining a “word” ’ と述べている。言語理論家として Hjelmslev と共に glossematics を建設した Uldall もサジを投げるとなれば、問題は重大である。辞書や Sweet の定義の不備をつくことは小ざかしい思い上りであって、それだけでは何の役にも立ちはしない。こうなると、定義ではない定義でなければ定義ができないということになる。漠然としている程融通がきくからである。絶望感は再び筆者をとらえる。しかし、これで諦観する位なら始めからやらない方がましである。‘mehr Licht’ を求めて、先人の歩んだ道をもう少し進んでみよう。何かつかめるかもしれない。

2. 意味の側よりの考察 言語はすべて形式と意味の綜合であることは今更いうまでもないことながら、素朴な言語感では形式には余り注意しないのが普通である。余りに明白なことなので意識のシキイには乗らないわけであろうが、これは言語を使用する意義が意味を伝達し理解することにあるためである。Sweet のような定義が生れる所以もここにある。もちろん、ここでは形式を伴うことは当然の大前提とするけれども、主として意味の側から語を考察するとどのようになるであろうか。ところで、意味論的立場といっても単一ではないので、これを一口にまとめることはできないのであるが、一応形式を中心にしない考え方をさすことにしよう。そうすると、山田博士の「単語とは言語における、もはや分つべからざるに至れる究極的思想の単位にして独立して何等かの思想を代表するものなり」¹¹⁾ という定義は、実質的には前出の Sweet とものと同様な趣旨のものではあるが、その説き方はもっとメンタリスティックである。さらに、「1つの語」には「梅、花、山、川」という単語と、それらが

11) 山田考雄「文法論」, p. 76.

集まった「山川、梅の花」というのがあるという時¹²⁾、前の定義は一步前進しているが、「1つの語」とみる基準は全く観念的で、単語に分解する方法がはっきりしていない(「山川」を「梅の花」と同様に取扱ったことに対しては更に疑問があろう)。意味上1まとまりということは、わかったようでわからないからである。Bally は語という用語をやめて、その代りに *semanteme* というのであるが、*faim de loup* なども1単位ということになる。これでは *where to stop?* である。これに関連して思いだされるのは、時枝博士の心的過程による語の規定である。¹³⁾ この考え方によれば、語はそれ自身質的統一体として言語主体の意識の中に存在するもので、1つの語とは、話し手の意識において、思想が1回の過程によって表出されたものである。「白墨」が1語であるのは、その言語の使用者が1つの思想としてそれを表現しているからであるとされる。そして概念過程を経て客体化されたものを詞といい、そうでない主体的なものを辞とする。後半の部分は日本語の特殊な事情があるので、これを別にして考えると、前半の部分は卒直にいて客観的なキメ手が欠けていると思われる。意識とか思想とかは、実はわからないのであって、個人によって異なる可能性のあることは否定しがたい。同時代の話し手の意識は大体において共通しているから、大した問題は起らないというが、少しでも意見の差が生ずることが最初から認められる限りは、純粋な意味において科学的でないといえないだろうか。たしかに、言語は厳密な意味で我々の主体的経験を離れて外在するものではない。従って、論理的に整然とした学説でも、どうも納得できないということがある。このような場合は、我々の考えの方が間違っているとするか、逆に理論に欠陥があるとするか、そのいずれかである。Bloomfield は「心」の方からは解明できないという立場をとるけれども、「心」の存在自体は否定できないのであるから、ここに極めてむづかしい問題があり、このことについては後でもう一度考えてみたいと思うが、精神作用そのものを以て説

12) 山田孝雄「日本文法学要論」, pp. 14—22.

13) 時枝誠記「国語学原論」, pp. 211—28.

明することは、*deux ex machina* であって、*x* は名前を変えただけである。極言すれば、「語と思うから語である」ということで、これに拠ることはできない。なぜ思うかということをも明らかにすべきであろう。

次に、この点に関連して Marty 流の考え方に触れてみることは有益と考える。¹⁴⁾ 簡単にいうなれば、構成的内部言語形式 (Constructive inner speech-form) によって語という単位の認識が行われるということになる (音声によって表される言語は外部言語形式であるが、これは直接に意味に結びつくのではなく、その両者の間に意味を喚起する手段として象徴的な内部言語形式が介在する。この内部言語形式は意味そのものでなく、その媒体となり意味を導く心的現象であって、意味に対して記号となる。これは、外部形式によって生ずる連想形式である比喩的なものと、一定の記号の結合の形式として習慣的に理解の爲の準備や期待を起させる構成的なものに分けられる。後者はいわゆる文法的機能に大体相当する)。意味の本質からいえば自義記号である「ものの名前」のほかに、共義的記号である動詞や副詞も、またその他のものも、思想の単位になるならぬにかかわらず、準備表象を齎す限り、語として認知されるのである。独立しない前置詞や冠詞などが語とされるのはこの理由によるものである。なお、語には通常単語と複合語と区別されるが、普通に考えられるように前者が1つの概念、後者は2つ以上の概念が不可分離に統一されたものではない。glove と Handschuh とを比べてみてもこのことはわかる。また Jespersen のあげている triangle と three-sided rectilinear figure を比較してみることが興味があろう。red breast と redbreast は全然別物であるということも、この立場からいうと補助的表象としては本来的に区別されるものでないから、意味論的根拠はない。ただ readbreast は red と breast が共義記号として緊密な syntax をなし比喩的内部言語形式となっている点が単なる語結合と異なる。これは語複合である (複合語は発生的観点からの名称であるとする

14) 中島文雄「意味論」, pp. 81—112.

る)。もし比喩的表象を介することがなくなれば、「茶碗」などのように1語と考えられる。each other などは語複合であって語結合でない。

以上が Marty 的考え方であるが、漠然と意味の統一体といわれているものに、内部的なメスを入れている点で参考になる。いわゆる意味の本質に関し、特定の立場より精緻な考究が行われているわけである。ただその根本的な立論の根拠が無条件に受け入れられるかどうかは問題であろう。すぐれた解釈である精神分析が、なお全面的に非客観性を払拭しきれないものをもっているのと同じような事情があるのではないかと思う。

このほかにも、まだ述べるべきことも多くある筈であるが、ここらあたりで外形から観察する立場にも触れておくことが必要であると考え。

3. 形式の側よりの考察 形式といっても簡単ではないが、2と反対に意味を中心としない立場というぐらいに広く解釈すると、まず書記法のことが考えつかれる。英語ではいわゆる語は雑して書くことになっている。従って一応スペースを以て語を分ける基準にすることができそうである。もちろんこれは当然に反駁されるのであるが、実際はこと英語に関する限り大体妥当することは認めねばなるまい。通例 air-mail は1語、sea mail は2語に書くのは不合理であるが、理由は別な所にあるのであろう。any one と anybody など首をひねらざるをえないが、こんな例はむしろ少数である。素朴すぎて話しにならないとはいえ、分ち書きが行われていることの裏には何かがある筈である。しかし、言語によってこのような書記法がないものがある。さしずめ日本語ではもう通用しない。ローマ字で日本語を書こうとすると、たちまち判断に迷うのがそのよい証拠であろう。また書記法を全然もたぬ言語もあるわけである。こうなると、すべてに共通する形式としては音声を考えねばならない。

橋本博士は、語という単位を認定するのに、文と語との間た文節という第3の単位を考えたのであった。日本語特有の事実も考慮したわけであるが、これは大体音韻論的 phrase とすることができよう。Jones の用語では breath group よりも sense-group に近いであろう。さて、この文節を構成する単位

を語と名づけたのであるが、独立して文節となりうるものを詞、然らざるものを（付屬）辞と呼ぶ（独立語と付屬語ともいわれる）。¹⁵⁾ さらに、語はより小さい有意味の単位に分解できるものがある。たとえば、「酒樽」は「酒」と「樽」の結合したものである。しかし、分解された要素はその場合独立して発音されることがないから、語とはならない。複合語とはこのようなものをさす（もちろん、アクセントや結合することによる音の変化なども同時に考え合わされる）。なお、複合語はその要素である「酒」や「樽」が他の場合には独立して文節となるものであるが、「小雨」、「白む」の「こ」や「む」は独立することはないので、複合語とは呼ばないわけであるが、これらには、上例のように単語に独立しない接辞がついたもののほかに、語根+接辞（ほのめく）、語根+単語（しず心）、語根+語根（しずしず）といったようなものもある。なお、付屬語と接辞の区別は余り明瞭ではない。どんな語にも自由に規則的につくのは前者であるとするが、程度の問題となる。

この橋本文法は、意味を考えないわけではないが、認定の基準を外形たる音声においたわけで、この点 アメリカの構造言語学の基礎を築いたといわれる Bloomfield の所説と軌を一にしている。そこで、次に Bloomfield の述べていることを、簡単にのぞいてみよう。彼によれば語は ‘minimum free form’ ¹⁶⁾ と定義される。自由形式 (Free form) とは発話の中で独立して現われる意味をもった音声続体すなわち言語形式 (Linguistic form) で、独立しない拘束形式 (Bound form) に対する。他の言語形式と部分的に音声および意味において類似する言語形式を複合形式 (Complex form) といい、その共通する部分を構成素 (Constituent) と呼ぶ。他のいかなる形式とも類似点を有しない言語形式が単一形式 (Simple form) であり、これすなわち形態素 (Morpheme) である。2つ以上の自由形式が集まったものを句 (Phrase) とする。従って句以外の自由形式、すなわち最小の自由形式が語ということになる。語

15) 橋本進吉「新文典」, pp. 295—96.

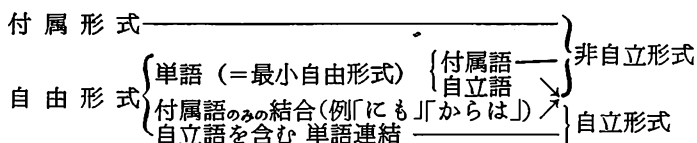
16) Bloomfield, L. *Language*, p. 178.

を直次構成要素 (Immediate constituent=IC) によって分類すれば、1. 一次語 (Primary word) ICに free form をもたないもの: a. Morpheme word (単一の free form たる morpheme よりなるもの。e. g. boy, man) b. Derived primary word (2つ以上の bound form からなるもの。e. g. receive, de-tain) 2. 二次語 (Secondary word) IC に free form をもつもの: a. Compound word (2つ以上の free form よりなるもの。e. g. blackbird, wild-animal-tamer) b. Derived secondary word (free form を1つだけ含むもの〔従って free form 以外の部分は bound form〕。e. g. boyish, old-maidish) という4種類が認められることになる。このすべてが minimum free form ということであるらしい。しかし minimum とはどこまでをいうのか、free とはどんな意味か、phrase と free form との境界となると、いわゆる「かぶせ音素」(Supra-segmental phoneme, Superfix) もからみあって、ことはなかなか面倒である。ice cream は /' / では語、/' / では句、dancing girl「踊子」は1語、「踊っている女の子」は2語の句であるとされる。free とは 'spoken alone'¹⁷⁾ と Bloomfield は規定しているが、これは独立して発話となるということである。ところが、a とか the などの冠詞は無理な situation をつくれば 'a, not the' といえるかもしれないが、通例単独にあらわれることはない。and などの接続詞も然り。同じことが boy についてもしえる。boy は a, the boy か boys としてしか発話にあらわれることはないから bound form となる。'alone' は服部博士のいうように 'separately (by means of pause) と訂正すべきであろう。そこで冠詞の a や the は this book, that book と同じく a or the book とか a or the big boy といえるから語であるという別な角度から語を規定する。また a name と an aim とでは実際の発音では区別がつけられない。これは連接 (Juncture) /+/ の現象として説明されるが、これは Pike も指摘しているように、鶏と卵の争いと同じ vicious circle になるといえる。もし自由に位置をかえることだ

17) Ibid. p. 160.

けを以て基準とすると, *the man I saw yesterday's hat* などの斜体の部分は1語であるということはおかしい。これは bound form の -'s がつくことだけを根拠としているらしいけれども, そうすると, *man, I, saw, yesterday* は全部語でない。しかし Nida は bound form とみず単語連結としている。¹⁸⁾ 従ってこれは, 長い複合語であると解釈されるわけで, 書く時は本来ならばハイフンでも結ぶべきものであろうが, 困ったことには複合語の特徴たる「かぶせ音素」の現われ方, 接続のあらわれ方等で一致しない面がでてくる。さらに, -'s もこのような結合方式をとる場合はむしろ後置詞 (Post-position) とみることでもあるのではないかという疑問もおこる。また I'm や don't などは1語か2語か。Bloomfield は基本交替形 (Basic alternant) に I am, do と not を認めて phonetic modification による2語の交替形であると考えるが, これは便宜主義的であって, 発話の中に I'm があらわれたとき, それは離すことができないから2語とは考えられない筈である。let's などはどうであろう。Fries は機能語 Group 0 として let us と区別している。¹⁹⁾ こうなってくると, 巨人 Bloomfield も一元的な基準でことは解決できないわけで, 必然的に多元的な規定を加えるのであるが, 結局スッキリしない。

このやり方を追求して, ある一つの極点を示したのが服部博士の次の表によって示される考え方である。²⁰⁾



これは日本語の説明に重点があるが, 英語に適用してみると, a や the の冠詞は独立して発話に現われなくても, 2つの形式の間に自由に現われるか

18) Nida, E. *Morphology*, p. 105. なお, word と minimum free form は別のものであるという立場がある。本稿5を参照のこと。

19) Fries, C. C. *The Structure of English*, pp. 150f.

20) 服部四郎 ‘附属語と附属形式’, 「言語研究」第15号, pp. 1—26.

ら自由形式であり（原則2）、従って単語であるが、単独で文（節）とならず自立語と連結するから付属語であり、従って非自立形式である。同じ理由で don't は常に1単位であるから do not と異なり1つの単語（自立語）とする。なお I'm は位置を変えて am I となるから2語である自立語である。happiness の -ness などは付属形式であり、同時に非自立形式であることには異存はない。複合語は単語であるが、breakfast などは brerk + fast と発音が異なるので、「えせ自由形式」同志の結合であるとされる。re-ceive などはこの表にあてはめれば自立語となるだけだし（これは付属形式のみの結合）、付属語のみの結合は、as if などが相当するかとも考えられるが、英語の場合は接続詞や前置詞なども、かなり独立性があるので、むしろ自立語とすべきであろう。自立語を含む単語連結も、その意味では in front of などの類ではなく、a boy などが僅かに相当するだけである。the man I saw yesterday's hat の -s は後置詞（付属語）でなくやはり付属形式であるのは、英語には他に後置詞がなく、また付属語ならば単独で発音できる基本交替形があるのに -s にはないし、このような形式に -s がつくのは特殊なケースで一般の用法でないからであるとする。斜体の部分は単語連結であるとされる。以上非常に形式をつきつめた考察で、付属形式と付属語を分けたのは、Bloomfield の泣きぼくろの1つを治療したわけで、かつ 'spoken alone' を前述したように 'spoken separately (by means of pause)' と改訂したことは大いに参考になるのであるが、これで完全にすべての場合が処理できるとはいえないであろう。

Trager-Smith は、phonemic word (plus juncture /+ / および secondary stress / ^ / のない音声連続体: taker /téykər/) と morphemic word (語根±接辞+superfix: slyness /sláy+nis/) の2つの語を区別し、両者は一致することもあるが、一致しないこともあることを述べている。²¹⁾ そして、I'm や don't の類は morphology よりも syntax の段階のものであるとし、これらは morphonemic phrase であって I + am, do + not の交替形で異

21) Trager-Smith, *An Outline of English Structure*, p. 58.

語形 (Allolog) と呼ぶ。精緻な記述であるが、一元的な外形による word の認知には直接役立たないように思う。

最後に、この系統のものとしては比較的最近の Greenburg のもの²²⁾ をみてみよう。彼はまず morpheme をとり出すことから始めるのであるが、結局 morph の境界は語の夫れであることに注目する。word は morpheme(s) にはかならないからである。次に、語は continuity ないし non-interruptibility をもつとする。ここで nucleus なるものを考える。これはその中に他の要素を入れると別のものになってしまう。school に house を結合させただけならば school house となり、school の中へは house は入れられない。さて nucleus は、それと同じ分布をもつ同じ class の他の形式と代用されるとき、その形式は 1 つの morph であるか、またそれと同じ働きをする 2 つの morph の連続 (thematic sequence) かである (gos に ling がつくときの gos はこれにあたらない。従って、nucleus ではない)。The man kill-ed it の場合 5 つの morph があるが、スペースに区切られた間には無限に (自由に) 他の要素が入りうるに対し、kill-ed の中には何も入ることができない。従ってこれだけは語の境界にはならないが、他はすべて語の境界となるわけである。ほかにもいろいろ述べているが、要するに、他の要素が中に入ることによって sequence が分離できるか否かということで語を判定することであるらしい。しかし、これは一般論とすると、ポルトガル語の farei (私はするだろう) は、目的語が中に入って far-lo-ei (私はそれをするだろう) となるから、そうは問屋が下さぬということになる。

4. 言理学的考察 今まで述べてきたところで、大ていの考え方は出尽くした感があるが、Togeby は、これらを整理して、新しい立場を打ち出している。²³⁾ 彼は言語の研究を 8 つの部門に分けて、そのおのおのの分野における語の定義を検討して、いずれも不完全なものであるとする。そのあらましは以上のとこ

22) Greenburg, J. H. *Essays in Linguistics*, pp. 27—34.

23) Togeby, K. 'Qu'est-ce qu'un mot?', *TCLP* V, pp. 97—111.

ろであらかた触れたから、ここには繰返さないが、1つ重要な項目がまだ述べてなかったからそれを補足すると、Hjelmslev は転位 (Permutation) を以て語を規定できるようなことをいっている。²⁴⁾ この場合転位というのは、Jack loves Jill: Jill loves Jack のように比較的大きな記号がそのままの形で位置を変えることで、その表現の順序の変化に応じて内容の変化が生ずることを以て語を規定したもの。ところが、Siertsema のいうように、²⁵⁾ Togeby それを誤解して、記号内の順序の変化は語にあっては内容の変化を伴わないと考へた。しかしそれはおかしい。記号内部の順序の変化は内容の変化をもたらすのである。従って far-lo-ei は順序の変化がないから、中に他の要素が入っても farei は語として統一がやぶれない。だから、Togeby が例外になるとして記載しているラポン語の likkâstât'tet (軽く動かす): likkâtâs'tet (動きを軽くおこす) も、当然のことで例外でも何でもない。Togeby は例外と考えたから、その解決策として、音調と結ぶものを文、接続詞と結ぶものを節、前置詞と結ぶものを前置詞群、冠詞と結ぶものを名詞群というように結合形式の段階を設けて、最終の段階は派生素 (Derivative) と結ぶ語幹 (theme) と規定し、その一つ前の、すなわち last but one の段階で屈折素 (Flexive) と結ぶのが語であるとしたのである。彼の定義は次の如くである。‘Un mot est une unité syntaxique dont un des constituants immédiats est une ou plusieurs formes liées de l'avant-dernier degré — ou unité du même niveau.’ ここで IC が重要であるのは、フランス語で grandes routes は -s が grande にも route にも結合しているから 2 語であり、grande-routes では grande-routes + s となるので 1 語ということになるからである。artificial florist は artificial flor + ist で ist はその上の段階で -s や -'s と結合するものであるから 1 語である。(L) mensarum は複数、女性、属格の 3 つの形式の最終前段階の結合形式である。なかなか考えた定義であるが、屈折素をもたない

24) Hjelmslev, L. *OSG*, p. 66.

25) Siertsema, B. *A Study of Glossematics*, p. 177.

grandement や、また独立しない冠詞はどうなるのか。Togeby は最後に苦しい弁解をしているが、後の著作では卒直にその欠陥を認め、結局 minimum free form という方式と各言語に特有な操作上の便宜とをつきまぜた定義を与えているが²⁶⁾、どうもスッキリしない。

5. 語を認めない立場 以上みてきたところで明らかになった通り、どうしても語を限定する最後のキメ手がみつからない。無理に徹底しようとすればできないことはないが、我々の意識とおよそかけ離れたものになってしまう。そこで学者達も余り語感とギャップが生じないように苦心するわけで、その為基準を単一のものとせず幾つも設けざるをえない。スッキリしないというよりも、基準のレベルがゴッチャになってくる。Bloomfield にしても、boy は free であるというとき、free とは utterance の単位になるということである。しかし a boy において、実際問題として、a はもちろんであるが、boy でも単独で発音されることは、余程特殊な situation でも設定しない限り、まずないことであるから free のレベルが同じでないといえる。その点 a も boy も結局五十歩百歩で、こうなると free form と bound form も選ぶところはないのではなかろうか。このように、基準を設ける際、レベルが同質でないことに、案外気がつかれていない（品詞の設定にしても、poor, poorer, poorest とする poor が the poor are... となるときは形容詞か名詞かと問うのは、実は次元的な差を意識していない論理の飛躍があるわけで、実は議論にならないのではなかろうか）。そこで、一元的な解釈を施すと、常識と異ったものになる。しかし、それはやむをえないと考えたらどうであろう。文法が言語の事実を体系的に論理的に記述するものであるならば、それは素人の俗な考え方と一致しなくても、かまわない。従って、minimum free form を一元的に規定して、それに外れたものは語としないという立場をとっても、差支えない。しかし、語という単位をそれにあてるとは混乱を起すおそれがある。そこで、語というものはないと考えることもできる。語とは俗人のタワ言であるにすぎない。そ

26) Togeby, K. *Structure immanente de la langue française*, p. 131.

んなものは、はじめからなかったとすればよい。

この意味で、Blochの構想に基いたものとして Hockett が述べている *lexeme* は注目してよいであろう²⁷⁾。*lexeme* とは *wordlike unit* であって、これは必ず *grammatical form* である。*grammatical form* とは *accidental form* と対照されるもので、文構造上必須の *morpheme(-sequence)* のこと。She wants a new hat で wants a new は *accidental* であるが、wants や a new hat は *grammatical form* である（ただし a new hatrack では a new hat は *accidental*）。この *grammatical form* を X とすると、それはより大きな X の IC であることもある。wants は want+s であるから。そこで、‘any X, in any context in which it is *not* an IC of a larger X, is a *lexeme*.’ ということになる。前掲の文では、she, wants, a, new, hat および /231↓/ の intonation morpheme が *lexeme* である。*lexeme* より大きな *grammatical form* は *nonce-form* という。new hat, a new hat, wants a new hat, she wants a new hat, She wants a new hat. が *nonce-form* である。twenty-eighth は2語といわれるが、twenty, eight, -th の3つの *lexeme* からなる。

これに関連して、Hockett は上の twenty-eighth は2語であるが、1つの minimum free form とし、*the man I saw yesterday's hat* の斜体の部分は5語であるが1つの minimum free form としていることを序でに述べておく。word とは minimum free form とする Bloomfield と異なり、両者は別のものとする立場で、一致させようとするから無理があるというわけである。

もう1つ Hockett は idiom という単位を紹介している。redbreast は red +breast であるが、これは鳥の1種であって、「赤い」+「胸」からは総合できない意味をもつ。このような *grammatical form* を Y とすると、‘Any Y, in any occurrence in which it is not a constituent of a larger Y, is an

27) Hockett, C. F. *A Course in Modern Linguistics*, pp. 166—176.

idiom’ ということになる。これに徹底すれば a new hat は皆 *idiom* である。ただし New York の New は *idiom* ではない。辞書は *idiom* を集録したものである。これと *morpheme* との関係は微妙なものがあるが、言語の単位として重要なのは *idiom* であって、*morpheme* が幾つあるかは問題ではない。*remote* と *demote*, *receive* と *conceive*, *survey* と *convey* とはそれぞれ2つの *morpheme* かもしれないが、果しておのこの *morpheme* は独立した意味をもっているかどうか疑わしいのではあるまいか。これを2つの *morpheme* とみない学者もあるとすれば、*idiom* の問題と考えられるのである。一体語という単位は文法のものではなかったか。このことに思いを至せば、*idiom* の存在を認めて語に代えることにも充分理由がある筈である。

最後に是非述べなければならないのは、Harris の語という単位を認めない1つの試みである。²⁸⁾ これは *morpheme* のみを単位とする。従って、*morpheme* が1つまたは2つ以上あつたものがあるだけであって、*utterance* に至る中間に語という単位を認める必要はない。語というものを設けようとするから問題が混乱するのである。語というものを独立させるためには、その規定をしなければならぬからである。たとえば、boy 1つを独立させるためにも、前にも述べたように、容易ならぬ困難がある。より simple に、より consistent に記述するためには、むしろ語という単位は有害無益なのではあるまいか。

6. 若干の考察 以上いろいろな所説を観察してきたが、それぞれ首肯できる点があると同時に、不満を感じるところもあったわけである。しかし、正直なところ、八幡の藪知らずに迷いこんだようなもので、Gordian knot を切る刀は筆者はもっていない。大体の問題点を列挙しただけでも意味があると考えられるぐらいである。とはいえ、若干の思いつきもないではないので、結論にはならないながら、その幾つかを以下に記してみたいと思う。

第1に、語という単位がなぜ問題になるかということを考えてみたい。我々

28) Harris, Z. S. 'From morpheme to utterance', *Lang.* 22. 161—813.

が実際に用いる言語は、parole のものである。その単位は文とされている。“Fire”などは立派な文である。そうすると、これを one word sentence などと呼ぶのは、その本質をわきまえない言といわれねばならない。これは語とは全然関係のないものであろう（文、節、句、語というレベルの差ではないのだから）。しかし、そういう名称が生れることにも理由がある。それは、そのような文の背後にあって、その成立をささえているものがあるからで、それが langue といわれるものであるが、その単位となるのが語とされる。それは文を形成する要素として意味をもつ。ということは、話部となって働くことにその存在が認められるということである。Marty 流に言えば、共義的な記号となるところに、言語の単位となる根拠があるわけである。従って語は品詞と全く無関係ではないであらう（品詞は実際の文において決定されるという立場があり、my love の love は名詞、I love you の love は動詞とするから parole のものであると考えられ易いが、これは逆であって、多くの文において、love は名詞または動詞として働くということに品詞の意味があるのであって、個々の文によっては、その範疇性を認めることはできない筈である）。語は langue としての文一般の中で相対的の職能をもつ単位として考えられる必要がある。

第2に、そのような理由で得られる語という単位は、果して科学的に規定できるものであるか、あるいはしなければならないものであるかどうかを考えてみたい。言語の使用者がもつ素朴な語感とは、実は矛盾だらけで、体系的組織的な記述の単位とならぬものであろうか。語というものがなくても、5に述べたようなもので代られてよいのであろうか。これはむづかしい問題である。ただはっきりしているのは、何か語に代るような単位がやはり必要とされていることである。それらは、従来語と考えられているものと、実はそんなに異ったものではない。Harris は morpheme だけを単位とするが、それならば一步を進めて、言語の記述を全部 syllable あるいは segmental phoneme を単位としても考えられないこともない。そうしないのは、やはりものには段階があるからであって、phoneme—syllable—morpheme—word—phrase—clause—

sentence というような単位が何かしら必要とされる理由があるからであろう。語が必要な単位となる根拠は、その記号的な自律性 (Autonomy) にあると思われる。内的意味からも外的形式からも、より小さい、またより大きい単位も考えられるが、それらは、統一体として単位的に働くには過不足がある。back と bag とが異なるのは /k/ と /g/ によるのではなく、それを含む 全体の単位の相違によるのであり、in the house と of the house の差は in と of の相違である。free form, bound form あるいは lexeme, idiom にしても一応は語という単位によって実は規制されているのではなかろうか。morpheme そのものも、本当は語を分解して得た結果であって、純粹に phoneme からの結合によってできたものではない。つまり、語を否定する「代り単位」は語という常識的単位を基底にもってはじめて考案されているフシがある。8 品詞を否定するために 8 品詞をまず考えざるをえないのと事情が似ているように思われるのである。もちろん、そのこと自体の意義は充分認められるのであるが、語というものを始めから無視することは、やはりできないと思われる。

それでは、語というものは科学的に規定できるかという問題になるが、根本的に申して、我々が語という単位を漠然とであるにしる意識しているという事実が否定できないとすれば、ある程度までは規定できないことはない、少くとも原理的には考えなければならない。心的現象そのものは、直接には捉えることができないけれども、それが客観性をもつ限りは、それは必ず外部形式に顕現していると筆者は考えるものである。語は形式だけでなく、意味も考える必要があるといわれるが、その意味もまた形式となって現われなければならないという立場をとることができる。これは言理学でいう content-form であって、ある動物は「いぬ」ないし 'dog' となって始めて言語の問題として考察の対象となるのである。このような形式をとらない限り、その動物は言語に外在する内容の実質 (Substance) である。従って、言語の問題はすべて形式によって規定すべきであり、もしそれが可能であるならば、科学的規定ができるといわなければならない。科学的概念は知覚的与件そのものでなくてもよいが、

経験的事実の背後にあるものと対応しなくてはならないであろう。0で触れた phoneme 概念にしても同じことである。語に関しても、実現しているものから抽象される形式的操作の中にその実体が把握される筈である。

第3に、そして最後に、然らばそのような語はどのように規定すべきであるか、ということが問題となる。これは今まで瞥見してきた諸説に照らしても至難なことで、筆者としても実はここに至って困惑の極に達するのであるが、今更引っこみが見つからないので、ひそかに考えていることを次に述べてみよう。さて、規定は一元的にしたいということで、レベルや質の異なった基準を混用することは望ましくない。筆者は結局「価値」ということに焦点を絞りたいと思う。すなわち、ある語 x はその全体がある言語の構造において、 x でないものと区別されるということである。それは非 x と相対的な結合をもたねばならない。この場合 x はそれ自身において、独立的なまとまりをなす。ということは、その全体が自由に位置を変更することができるということを意味する。全体とは部分でないということで、部分はその位置を変更することができない。なぜかならば、部分の変更はその単位における表現の形式たる言語の音声とそれと結びついている内容の形式たる言語の意味の変化をもたらずからである。古代ギリシャ語で *patroktónos* (父を殺す) と *patróktonos* (父に殺される) のようなアクセントの変化も部分の形式の位置の変更であり、これは別の語である。表現も内容もともに異なるからである。前に示したラポン語の例も同じと考える。rex と regis, boy と boys は同じ語の変化形だが独立する。(なお、Metathesisは音位の転換が定着した形式であり、NeutralizationやSynonymなどは別種のことであるから、この場合の問題としない。) つまり、ある言語形式の全体が、その部分の配列順位の変更を許さず、自由に切断される場合、これを語と規定するわけである。切断するとは、独立させすることであるが、この基準はその連続体がそれと結ぶ前または後の連続体との配列を変更しようということ、両者の関係は互に順序が入れ変ってもよし、その間に他の連続体が現われてもよし、また全く別な位置に離れてもよい。さらに前後のものがな

くなって発話そのものとなることもあろう。要するに、その言語の全体的分布
 上前後のものと不可分離的な結合を示さないということである。これは相対的
 な機能でX, Y, Yがある場合 YX, ZX, XY, XZ, YZ, ZY, ZY が可能であれば3者
 は自由に位置を変えたことになる。もし XY と ZY の結合しかなければ3者
 は自由な切断ではない。しかしXYZとZXYがあればYは独立するものといえ
 る。このようにして得られた切断形式が語であるが、これに2つの種類がある。
 すなわち、redbreast のような場合、これが1単位であることは上の規定で明
 らかであるが、これを構成している red と breast は、他の場合独立しうる切
 断形式でもあるから、全体の分布では語となる資格をもっている。そこで、最
 小の切断形式を単語と呼び、単語から成立する語を複合語と呼ぶ。それでは、
 boy と boyish はどうなるか。これはともに単語である。なぜなら -ish は英
 語の全体の分布で切断形式ではないからである。最小とは全体の分布における
 連続体の切断の究極の単位ということで、-ish は切断されることはない。従っ
 て、boy も boyish も同じ単位である。拘束形式だけから成立している conceive
 のようなものも、単語であって、この点は同じである。単語の内部構成
 は異なることはいうまでもないが、それは形態論の問題（形態論と統語論とを
 区別しない立場でも段階は異なる）であって、ここでは立ち入らないことにす
 る。ただし、単独で文になりうるような自立語と、常に他の自立語と共に現わ
 れる付属語とを区別することは有益であろう。それは語の内部構成とは全く
 無関係であるが、自立語と独立する切断形式とは必ずしも一致するものでない
 ことを明らかにするのに役立つ。

上のように規定されると、その適用はどのようになるであろうか。普通の場合
 は例示する必要がないであろうから、特殊なものを眺めてみよう。まず英語
 に当たってみる。独立性をもたない冠詞、接続詞、前置詞なども、切断されうる
 から語であることがわかる (*a boy — a big boy; I'll go if it's fine — If he's*
well, I'll go; a and b — b and a; I'm interested in it — What are you
engaged in?)。次に縮約された I'm や it's の類は am I, is or has it とな

るから2語である。この場合 am や is or has が基本形で 'm や 's は交替形である。don't や can't は do not や can not に分解できる 交替形とみる立場もあるが、これは I'm と事情は異なり not do, not can とならず、I don't, I can't が don't I, can't I となる。すなわち、don't や can't は全体として切断され、その部分の配列は位置を変更しない。従って、これは1語と考えなくてはならない。let's も let us と区別される別の1語である (Let's go — Don't let's go — Let's don't go — Let's not go)。以上の縮約形は単語か複合語か。これは交替形の結合で morphophonemic change が行われた結果1語になったものである。すなわち複合語である。複合語といえば、blackbird や aboutface の類は問題がないとして、artificial florist や criminal lawyer, old-mandish, the man I saw yesterday's hat, devil-may-carish などはどう考えるべきであろうか。これが単なる語群と感ぜられないのは、実は拘束形たる接辞 -ist, -er, -'s, -ish がその直前の単語に結合しているのではなく、前の語群全体にかかっている構造であるからであるが、ここでの規定によれば、そのことを理由にすることはできないわけで、同じ原理により、単語の連続体が切断されることなく、全体としてその順序のままで転移するという分布の上の事実による。つまり、artificial flower ならば、artificial and natural flower とか the flower とか the flower is artificial とかいえるが、artificial florist や old-maidish, criminal lawyer はその全体がいつもそのままで1単位であるところに複合語と認める根拠がある。dancing girl は dancing and singing girl となれば句、singing dancing girl は複合語である。ice cream もこのままで位置を変えれば複合語である。なぜ1単位であるかという説明は上に一寸述べた IC によるとか、その意味論的構造の解明によるとか、ストレスによるとか、方法はいろいろあろうが、それはここの問題とはならない。ただ the man I saw yesterday's hat を含め上に挙げた諸例は、これらを構成している個々の単語が、本質的に必然の結合をなさず、全く臨時的な結合をなす。しかしこのような複合語の形式そのものは英語の分布上認められることで、いかな

るこ語も引用形式において名詞となりうるというのと同じ程度の *langue* の事実である。ところで, *the man I saw yesterday's hat* の *-s* は *man* にかかるとも考えられ, いわゆる *discontinuous constituent* とする方法もあろうし, また *post-position* とすることができないかという疑問もわくが, 英語に後置詞はないし, 不連続素は英語における *distributional pattern* がそれを許さないとみるべきであろう (*-s* は必ずその前のものと結んで連続体の最後になるだけ)。 *devil-may-carish* などの例は, この解釈を支えるものである。この場合 *-s* や *-ish* がなければ, 全体の単一性は崩壊するので, これは *the man I saw yesterday* という複合語に *-s* がついたのでなく, 全体が複合語なのである。 *a would-be-my-wife girl* はゼロ接辞のついた複合語である。ところで, 複合語と句(*Phrase*)とはどこで区別できるのであろうか。これも同じ基準による。 *put off* は *postpone* と同じ意味かもしれないが, *put it off* となる分布があるから複合語でなく句である。 *get off* (降りる) は複合語である。 *at a distance* は *in the distance* とだけを比べてみても句であることは明らかである。

さて, 英語の場合はよいとして, 他の言語ではどうであろうか。フランス語の *il a aimé* はラテン語の *amavit* に相当するが, 前者は3語, 後者は1語である。 *ils ont donné* と *ils ont acheté* で, *ont* は前者では [ɔ̃], 後者では [ɔ̃t] と [t] が入るが, これは *sandhi form* であるから同一語とされる。 *J'ai* も *ai-je* となるから2語である。 *au* は *eau* や *haut* と同じ表現の形式をもつが, *à + le* の縮約形である。この分布は *à + la* と同じであるし, *à l'hôtel* のように母音で始まる語の前では分解する。したがって, これは2語と解釈した方がよいと思う。すなわち, *à le* の交替形とし, 複合語とみないことにする。なぜかならば, 必ずしも独立の切断形式として存在しないからである。ドイツ語の場合でも, *anfangen* は2語と考えられる。というのは *Wir fangen unsere Arbeit an* となり, 複合語でもありえない。 *Rotwein* や *Mittelnacht* などは, 本来ならば形容詞の屈折があるところが失われ, 1つの連続体となっ

て現われるから、複合語である。Bloomfield は Sing- oder Raubvögel というような特殊な例をあげている²⁹⁾ が、これは 'ness' is a suffix と同じような場合であろう。決して常態ではない。

日本語で、「山」と「川」が一緒になった「山川」が複合語であることには異存はないが、「梅の花」は問題があろう。「梅の花と実」では「梅の花」は3語である。これは「梅+の+花」と切断されるからで、「花」と「実」が対照されている。「匂おこせよ梅の花」では「梅の花」が切断される。もちろんアクセントや接続の問題もあるが、ここでは切断の基準によっているわけで、後者では3語の連続が1単位の複合語である。さて日本語において、一番困難なのは、付属語か接辞かの区別であって、学者の意見も一致していないものがある。「書く、書かない、書け」といった、いわゆる活用形は、その全体で切断されるから、特に異存はないと思われるが、「書いてくれ」の類はどうなるか。これは「書いて+くれ」となる2語であろう。「書かれる」はむづかしいが、筆者は1語と考えたい。「いろいろな」は「いろいろに」と比べて「いろいろ+な、に」となる2語。「大きな」は1語ということになる。日本語の場合は、切断ということが、連続体間の結合がどのようなおきかえを許すかということにかかることが多い。「私に、を、の、へ、が、を」は2語、「私だけ」も2語 (cf. 「私にだけ、私だけに」) というような切断関係に留意しなければならない。なお、「白靴」などが果して複合語であるかどうかについては、問題がないわけではない³⁰⁾ ことを付記しておく。

中国語は、Bloomfield は自由形式だけであるようなことをいっているが、これは見当ちがいで、「-子」や「-了」や「-的」などは、拘束形式である。これらには、しかし、いろいろ段階があるわけで、接辞と付属語の境界がはっきりしないため、結局統計的な処理を実際問題としては行われねばならないかもしれない。語の認知が途方もなく複雑な様相を呈してくるのは、かえって、中国

29) Bloomfield, L. *Language*, p. 232.

30) 服部四郎「台湾語常用辞典」序文, pp. 3—19.

語のような一見簡単な言語においてである。連続体同志のコンビネーションが割切れないからである。しかし、本稿の基準によって、具体例については一応語という単位をとりだすことはできるであろう。

ところで、一寸困った現象がある。それは、「洗澡」(風呂)という1語の中に「一個」という別な語が入って「洗一個澡」のようになることである。これは、前出のポルトガル語における farei に対する far-lo-ei と一応形の上では同じである。問題は、このように、他の要素が入った場合、もとの語である連続体が途中で切断される場合、全然異なる語とみるか、それともやはりもとの語としての統一体を認めるかということである。さらに、中断する要素が語として独立するものか、非自立形式たる接辞であるかということ、もう一つは、その中断形が、その言語の構造において、珍らしくないものか、極めて特殊な臨時的な現象であるか、ということも併せ考えねばならない。中国語の場合、「一個」は自立形式であるが臨時的な性格のもので、趙博士は ionization (イオン化現象) といううまい比喩的説明を与えているそうであるが、far-lo-ei の lo もこの類例になるのではないかと思う。共通しているのは、部分の順列が変更されていないことで、全体としては連続し、語を認める条件はくずされていない。これらは、したがって、一種の複合語と考えることができよう。なぜかならば、他の要素が中に入っても、いつも同じ連続体として切断されるからである。

しかし、このような形式が一般化し、連続体の部分が位置を変更しても独立して切断されないことになると、poly-syntheticな輯合語ないし抱合語になる。この場合は部分のすべてが拘束形であることになる。エスキモーやアメリカインディアンの言語がそれである。0に示した Sapir の例によってもわかるが、Whatmough がいうように³¹⁾ comic strip にみられる 'Yashoudofwaiamin' (= You should have waited a minute) のような連続体に似ている。しかし英語のようにその部分を独立して切断することが困難である。このよう

31) Whatmough, J. *Language*, p. 54.

になると、話部にはならぬが、その全体が1語であるとみるより仕方がない。
これらの連続体の部分はそれぞれ複雑な構成をもつようであるが、本稿ではそれらに立入ることはできない。